

総評 2023 年 11 月分 杉本真維子

「接吻をするかのごとく、／葉は色づいている／私、生きていたい」五代 康成（埼玉県）  
どこか控えめな紅葉と燃え滾る命のバランスが印象的です。

「〈沈黙〉が私に見入る／手付かずの雨が／トイレの鏡を濡らす」常田 瑛子（山口県）  
公共施設などにある薄暗いトイレを思い起こしました。あのひっそりとした静寂が蘇ります。

「花びらを製氷皿に敷き詰めて／生まれる前のドレスを作る」常田 瑛子（山口県）  
意味ではないものが正確に書かれていて、美しい、と感じます。

「この距離で撃ち抜かれれば／心臓は止まる／指鉄砲で怯える」常田 瑛子（山口県）  
かたちが意味をつくっている。そのことにおののく瞬間が、きりとられています。

「暖炉照る夢突き崩す火搔き棒」田崎森太（東京都）  
命の根源のようなものが熱く隆起しています。

「目を瞑りニワトリ小屋で声を聞く／どれだけ聞けばニワトリになる」貴田 雄介（熊本県）  
他者の声を体内に入れることで他者になる。その可能性がひらかれています。

「性交をせずにたばこを吸う夜の／底の方から雪であかるい」穴棍蛇にひき（東京都）  
普段は気に留めないおのれ（個）の輪郭の際立ちと、それを祝福する包容力があります。  
にんげんや世界という大きなものを書く力がありそうです。

「温かいご飯をよそに／確実に傷ついていく母のまな板」かわなご まい（埼玉県）  
まな板はそういうものだから、という決めつけをしないところがいいですね。縛られない  
感受性に注目しました。

「もずく酢をじょんと飲み干し／液漏れの電池の処理を／調べてねむる」うろ仔（北海道）  
「じょん」というオノマトペが大変的確です。

「摘蕾をやめてしまえば僕としか／生きていけない果樹園になる」辻村陽翔（北海道）  
これは「僕」と「果樹園」の愛のうたでしょうか。それ以外にこちらに何も言わせないよ  
うな強さがあります。

「街角の青果店では赤ん坊と／ひかるみかんが初雪を見る」平山（東京都）  
青果店、赤ん坊、みかん、初雪など、瑞々しいものたちがそれぞれ自分の輪郭をくずすこ  
となく光っていて、いいと思います。

「「ねえ、おいで」／もみじのような手にすがる／ちいさいことはつよいことだね」うたた  
(岡山県)

大人は子どもに助けられている。これは間違いのないことだと思います。親をおもう子ども  
の気持ちは、子をおもう親の気持ちよりも無条件に深いなど、いろいろなことを思うこ  
とになった。印象的な作品です。

「他人との関係性に疲れたら／配電盤を覗きたくなる」青桐紗矢(神奈川県)

未整理が整理に癒されている。配電盤は一種のカタルシスですね。

「柵越しの母校無人のブランコを／キョウコキョウコとから風が押す」結城熊雄(東京都)

キョウコキョウコが面白いです。名であり、母校の思い出を強固にするようでもあり、読  
みがひろがります。

「思ったよりもごわごわする鹿に／さわった指を濡らして拭う」松下 誠一(東京都)

動物という存在の異質感が言葉から運ばれてきます。

「君にだけ壊れるくらい課税して／さよなら僕の総理大臣」源楓香(東京都)

源さんは「総理大臣」などの語の取り入れ方が巧みです。そこから独特の抒情をかもし出  
します。

次回の投稿も楽しみにしてお待ちしています。